

福岡女学院大学紀要 人文学部編 第三十二号

二〇二二年三月

# 『遊仙窟』所収詩についての研究

—形式からの考察 其の二—

渡  
邊  
寛  
吾

# 『遊仙窟』所収詩についての研究

―形式からの考察 其の二―

渡 邊 寛 吾

一

本稿は、先に『遊仙窟』所収詩についての研究―形式からの考察 其の一―<sup>1)</sup>として発表した論考に続いて、『遊仙窟』に載る残りの詩について考察するものである。

『遊仙窟』は初唐後期（七世紀末頃）に張鷟によって書かれたとされる小説で、その中には八十四首の詩が載せられている。この頃は南北朝期以降、詩作の際の音律に向けられていた意識が一段と高まりをみせ、近体詩としての形式を整えていく時期であった。『遊仙窟』の詩は、小説の中に組み込まれた詩という特殊なものではあるものの、そのような時代の詩として現存する詩としては一定数を持つことから、これらの詩が古体詩と近体詩との間のような状況にあるのか考察することは意義あることと考える。

次に『遊仙窟』の詩、八十四首を形式から分類した表を改めて示しておく。先の論考で考察を行ったのは、七言を中心として十句以上の句数を持つ三首の詩であった。本稿では五言八句十一首、六言八句一首、そして七言四句

五首と七言六句一首の計十八首を考察対象とする。残る五言四句の詩五十七首については、別に考察することとしたい。

	十句以上	八句	六句	四句	
計	6	68 (3)	1	9 (1)	84 (4)
	0	0	11 (1)	0	3
	0	0	0	1	1
	6	57 (2)	0	5 (1)	68 (3)
	四言	五言	六言	七言	計

※カッコ内は仄押韻の詩

二

詩の本文については、『遊仙窟全講 増訂版』に依り、必要に応じて古写本や注釈書を示しながら検討を加えていくこととする。四声の確認は『校正宋本広韻』を用いた。また、説明の便宜のため前稿同様に、それぞれの詩について『遊仙窟』での掲載順に番号を付している。

まずは、五言八句の詩十一首の各句末の文字の四声について見ていく。詩76のみ仄押韻である。各詩の奇数句、偶数句の四声の対応が見やすいように聯毎で改行して示している。

・詩1―則（入声二十五徳韻）

眠（下平声一先韻）

手（上声四十四有韻）

絃（下平声一先韻）

	絶（入声十七薛韻）	怜（下平声一先韻）
	肯（上声四十三等韻）	天（下平声一先韻）
・詩22	樹（去声十遇韻）	林（下平声二十一侵韻）
	影（上声三十八梗韻）	陰（下平声二十一侵韻）
	見（去声三十二霰韻）	尋（下平声二十一侵韻）
	摘（入声二十一麦韻）	心（下平声二十一侵韻）
・詩23	下（上声三十五馬韻）	芳（下平声十陽韻）
	影（上声三十八梗韻）	香（下平声十陽韻）
	芎（入声十九鐸韻）	房（下平声十陽韻）
	取（上声九麌韻）	箱（下平声十陽韻）
・詩46	苑（上声二十阮韻）	園（上平声二十二元韻）
	迥（入声二十七合韻）	繁（上平声二十二元韻）
	淨（去声四十五勁韻）	喧（上平声二十二元韻）
	嶺（上声四十静韻）	源（上平声二十二元韻）
・詩47	士（上声六止韻）	仙（下平声二仙韻）
	劍（去声六十梵韻）	錢（下平声二仙韻）
	柳（上声四十四有韻）	蓮（下平声二仙韻）
	処（去声九御韻）	前（下平声二仙韻）
・詩48	苑（上声二十阮韻）	林（下平声二十一侵韻）

出（入声六術韻）

酒（上声四十四有韻）

夕（入声二十二昔韻）

· 詩 68 | 別（入声十七薛韻）

影（上声三十八梗韻）

色（入声二十四職韻）

在（上声十五海韻）

· 詩 69 | 去（去声九御韻）

緒（上声八語韻） ×

後（上声四十五厚韻） ×

密（入声六術韻）

· 詩 70 | 別（入声十七薛韻）

淚（去声六至韻）

匣（入声三十二狎韻）

体（上声十一荠韻）

· 詩 75 | 局（入声三燭韻）

散（上声二十三旱韻）<sup>2</sup>

鵲（入声十八葉韻）

變（去声三十三線韻）

沈（下平声二十一侵韻）

琴（下平声二十一侵韻）

陰（下平声二十一侵韻）

春（上平声十八諄韻）

塵（上平声十八諄韻）

新（上平声十八諄韻）

人（上平声十八諄韻）

年（下平声一先韻）

絃（下平声一先韻）

前（下平声一先韻）

穿（下平声一先韻）

禁（下平声二十一侵韻）

心（下平声二十一侵韻）

林（下平声二十一侵韻）

侵（下平声二十一侵韻）

觀（上平声二十六桓韻）

寒（上平声二十六桓韻）

鸞（上平声二十六桓韻）

看（上平声二十六桓韻）

・詩76―水（上声五旨韻）

風（上平声一東韻）

起（上声六止韻）

握（入声四覺韻）

闕（入声十月韻）

月（入声十月韻）

発（入声十月韻）

歇（入声十月韻）

続いて、七言四句の詩五首を載せる。詩83は仄押韻である。

・詩18―客（入声二十陌韻）

戰（去声三十三線韻）

渠（上平声九魚韻）

虚（上平声九魚韻）

・詩19―愛（去声十九代韻）

耳（上声六止韻）

侵（下平声二十一侵韻）

心（下平声二十一侵韻）

・詩31―碁（上平声七之韻）

眼（上声二十六産韻）

思（上平声七之韻）

遲（上平声六脂韻）

・詩82―天（下平声一先韻）

外（去声十四泰韻）

年（下平声一先韻）

辺（下平声一先韻）

・詩83―処（去声九御韻）

生（下平声十二庚韻）

遇（去声十遇韻）

去（去声九御韻）

そして六言八句と七言六句の詩、各一首は以下の通りである。

・詩36―辺（下平声一先韻）

柳（上声四十四有韻）

仙（下平声二仙韻）

蓮（下平声一先韻）

媚（去声六至韻）

妍（下平声一先韻）

得（入声二十五徳韻） 泉（下平声二仙韻）

・詩84―見（去声三十二霰韻） 心（下平声二十一侵韻）

得（入声二十五徳韻） 聞（上平声二十文韻）

乱（去声二十九換韻） 心（下平声二十一侵韻）

本文に異同があるのは、詩46と詩76の傍線を付した奇数句末の二カ所で、それ以外に異同はない。このことについては後述するとして、まずは押韻状況等について確認する。

五言八句の詩の押韻の状況については問題は無い。七言四句の詩の内、詩31、82、83では初句でも押韻をしており、六言八句の詩36でも初句で押韻をしている。次に詩83と詩36の通韻について言及しておく。詩83の韻字の「処・去」は去声九御韻、「遇」は去声十遇韻で、ここは通用していると考えなければならないのだが、『広韻』では去声九御韻は独用であり、十遇韻とは通韻はできない。しかしながら、初唐・宋之間「景龍四年春祠海」（『宋之間集』）では、韻字だけを示すと順に「慮・鶯・注・霧・互・煦・樹・路・屢・処・遇・署・趣・喻・暮」とあって、独用とあつた去声九御韻「慮・処・署」と十遇韻「鶯・注・霧・煦・樹・屢・遇・趣・喻」、それと同用となる十一暮韻「互・路・暮」に属する文字で韻が踏まれている。このような例は他にも幾つか確認でき、ここも通用していると考えて問題ないであろう。詩36の下平声一先韻と下平声二韻については通用で問題ない。詩84については、「心」と「聞」で韻が異っており、二句毎で換韻されていると解しておく。

では、奇数句末の四声はどのような状況であろうか。奇数句末の文字に「×」を付けているのは互いに四声を同じくするもので、四声八病の「鶴膝」を犯していることを示している。ここに載せる五言八句十一首の中では、詩23と詩69でそれぞれ一カ所の「鶴膝」が認められる。その一方で、これら五言八句の詩には初句で押韻をしているものは無いので四声が全て揃いはしないが、本文異同のある詩46、詩76を除いて、詩22や詩70、詩75では平声以外

の三つの声調が使われている。四声八病は基本五言詩についての詩病であるが、七言四句の詩でも初句押韻をしない詩18や詩19では「鶴膝」を犯すことなく、詩36でも三、五、七句はそれぞれ四声を異にし、詩84でも前後別々の声調になっている。そして、前稿で考察した七言を中心とした十句以上の詩三首、詩5、8、9でも「鶴膝」は守られていることが確認できた。

唐代の「鶴膝」の状況について、王力『漢語詩律学』<sup>4</sup>は四声に依る奇数句の末字への配慮が大きかったことを、宋代にはその意識が無くなっていることと対比させることで指摘しており、興膳宏氏は「四声八病から平仄対応へ」<sup>5</sup>の中で、その指摘を承けて、

唐代の詩人たちは、近体詩の詩型の成立後も、依然として八病の一つ「鶴膝」を遵守しようとしていたことが分かる。

と述べている。つまり四声の対立から平仄の対立へと向かう初唐期のみならず、唐代全般に「鶴膝」への配慮は認められるようである。以上の状況から判断すると、『遊仙窟』の詩でも「鶴膝」に対する配慮の大きさは認められると考える。

さて、ではその理解の上に立って、改めて詩46と76の異同について考えてみたい。

詩46の第五句と第六句は「水明魚影浄 林翠鳥歌喧」とあって、対句となっている。第五句の末字を「浄」とするのは、古写本では醍醐寺本、ただし左下に「静」の注記がある。そして注釈書では『全講』である。真福寺本と江戸前期無刊記本には「静」とあり、岩波文庫（漆山）、創元文庫、岩波文庫（今村）、中国古典小説選、『遊仙窟校注』では「静」を採用する。<sup>6</sup>これと対となる「喧」に異同は無く、「喧」との対応を考慮すれば、

簷喧猶有燕 陂静未来鴻（隋・蕭愨「秋日」、『初学記』卷三秋）

豈知人事静 不覚鳥声喧（初唐・王勃「春莊」、『王子安集』）

など、六朝、初唐期に対となる例も確認できることから、「静」とある方が相応しいと言える。

だが、そうするところに韻律上の問題が生じてしまうのである。「静」は上声四十静韻に属し、第七句末の「嶺」と韻が同じになってしまう。勿論、「嶺」に異同は確認できない。ここが四声が同じだけならば、つまりは通常の「鶴膝」の違反であるなら、「鶴膝」の違反が皆無ではないことから「静」を採用するべきと考えるが、『遊仙窟』では詩のみならず、地の文には四六文が現れることも考え合わせると、作者は韻律にかなりの知識を持ち、また配慮をして叙述しており、奇数句で韻を踏む状況になる文字を採用するのであるうかと躊躇してしまふ。対して「浄」は去声であり、韻律の点からは「浄」の方が適切と判断される。

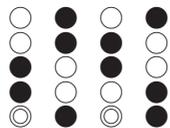
現状、表現と韻律との間でそれぞれに問題を抱えた状態である。この点に関して、結論から言えば本稿では「静」を採りたいと考える。確かに『遊仙窟』の詩は韻律への配慮が大きいのであるが、それは表現の上に立ってのものであり、「喧」との対の適切を優先したい。加えて、「浄」と「静」、つまり「シ」と「青」との書き間違いを考え、た時、字体が簡略で画数も少ない前者を後者に書き誤るよりは、後者を前者へと書き誤る方が可能性が高いと考え、るからである。ただしこの本文では先に述べたように、第七句末「嶺」と同じ韻になるといふ、他に例のない韻律上の違反を犯していることになる。

続いて詩76について見ていく。この詩は入声十月韻で押韻するのに対して、一・三・五の奇数句には異同もなく、入声と重ならないようになっていく。だが第七句末については「希君握掌中」とする醍醐寺本と、「希君掌中握」とする真福寺本と江戸初期無刊記本がある。金剛寺本には「希君握掌中」とあつて両者が交錯した本文になっている。なお最初の「握」には「江本」と大江家本を参照した注記が付されている。「希君握掌中」の本文を採用する注釈書は、岩波文庫本（漆山）のみで、他は「希君掌中握」を採る。第七句末を「握」とした場合には、「握」は入声で「上尾」の違反となる。『全講』では、「握」の本文採用について、



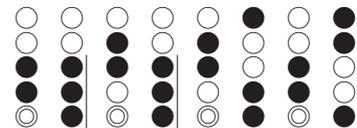
· 詩 23

暫遊双樹下  
遙見兩枝芳  
向日俱翻影  
迎風並散香



· 詩 22

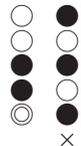
新花發兩樹  
分香遍一林  
迎風軋細影  
向日動輕陰  
戲蜂時隱見  
飛蝶遠追尋  
承聞欲採摘  
若箇動君心





· 詩 48 — 極目遊芳苑

欲知賞心處  
桃花落眼前



相將對花林



霧淨山光出



池鮮樹影沈



落花時泛酒



歌鳥或鳴琴



是時日將夕



携樽就桂陰



· 詩 68 — 別時終是別

春心不值春



羞見孤鸞影



悲看一騎塵



翠柳開眉色



紅桃亂臉新



此時君不在



嬌鸞弄殺人







さて、個々の聯での二四不同には配慮が見られるが、聯相互を繋ぐこととなる粘法については配慮している様子は見られない。詩1、詩23、詩75では四つの聯全てで反法を満たしはするが粘法に不備があり、近体詩として完成しているものはない。

二四不同以外の句中の問題点については、下三連の内、三平連が二カ所、対して三仄連は三カ所の三仄連を持つ詩22他、十一首中七首に九カ所確認できる。三平連が回避されるべきものとされるのに対して、仄三連については、その出現頻度から大きくは問題とされないとしれば言及される。古川末喜氏の「五言律詩の平仄式、及び拗句について―教学上の観点から―」<sup>7</sup>によれば、『唐詩三百首』中の五言律詩七十九首の調査で仄三連は二十二カ所、三連は三カ所確認でき、これは三平連が重大な違反とされた証左とし、また、丸井憲氏は「五言拗律の系譜―方回『瀛奎律髓』の「拗字類」を手がかりに―」において「仄三連」は初唐以来ほぼ律句に準ずる扱いを受け、各時代を通じて五律に頻用されてきたが、一方の「三平連」は律詩制作上の禁忌と考えられてきた」と述べている。仄三連が厳しく問われないのは、それが同一声調の三連続ではないからと考えてはどうであろうか。例えば、詩22の仄三連三カ所は順に「入・上・去」、「去・去・上」、「入・上・入」であり、四声で見れば連続はしていない。ここにある九カ所全てがそうである。つまり先に見たように、「鶴膝」への配慮、四声への意識がまだ生きていた当時の詩人達故に仄三連は許容されたのではないだろうか。

孤平は詩47、詩48の共に第七句に「●○○●」の形で出てくる。しかもそれを受ける第八句もまた「○○●●◎」と同じ形である。偶然の一致であるのか、何かしらの韻律上の配慮の結果なのかは、不明である。他には仄押韻の詩76にも一カ所ある。弧仄は三カ所である。

以上のことから、『遊仙窟』の五言八句の詩では、一つ一つの句、それで構成される聯内での平仄配置への意識は高いものの、近体詩に見られるような詩全体に及ぶまでには至っていないと言える。





最後に、『遊仙窟』中の五言八句の詩の時代的な位置付けについて見ておきたい。それを考えるために、次の二つの論考を参考にしたい。

松原朗氏は「初唐期にける五言排律の形成をめぐって」において、六朝末期の詩人、徐陵や江総、庾信など七人、そして初唐期の詩人として王績、王勃、盧照鄰、宋之問ら十一人を選び、彼らの五言詩での拗句、失対、失粘の調査を行っている。その中で、六朝末期の詩人の近体詩の三つの規格（律句・対法・粘法）の調査結果から、律句がほぼ完全に守られていること、対法については基本的には遵守されていること、対して粘法への配慮が見られないことを指摘した上で、「初唐における近体詩の形成は、まさしく粘法の確立と徹底にかかっていた」と述べる。それが、初唐期になると時代を追う毎に失粘の割合が低下して、宋之問や沈佺期では「失粘率は1%まで低下し、ほぼ完全に近体詩＝律詩へと収斂している」と結論付けている。

興膳氏（前掲論文）も同様の調査をしており、初唐初期の上官儀、虞世南、李百薬、許敬宗とその後を継ぐ王勃、楊炯、宋之問、沈佺期の「二四不同」、「拈二」について調査し、前者は「総じて句中の「二四不同」に関しては、おおむね規律を守っているが、「拈二」あるいは句間平仄対応については、あまり神経を用いていない。太宗期の詩人たちは、「拈二」を詩型として理想的な形とする認識を持っていた可能性はあるが、その規律をすべての詩について適用するまでには至らなかった」とまとめられ、後者には「これら四人の五律において、「拈二」を実践している作品が大きく増加している」が、二四同仄声のあることを以て「六朝的な声律の名残を完全には払拭し得ていなかった」と指摘している。

両氏は調査対象や方法の違いから、導き出された数値を若干異にするが、近体詩の完成を通時的に考える中で、

初唐期の粘法の達成度合いに注目すること、時間の経過と共に上昇すると指摘する点は同じである。

さて、『遊仙窟』の作者は張鷟で、彼は顯慶五（六六〇）年に生まれ、開元二十（七三二）年に七十三歳で没したとされる。『遊仙窟』は七世紀の末頃の成立と考えられている。この頃は初唐も半ばを過ぎ、武則天が政治を行っていた時代であり、初唐四傑が没し、宋之問や沈佺期が活躍していく時期である。時代的には粘法の達成度合いも上昇し、声律上は五言律詩へと到達しようとする頃合いである。

しかしながら、松原氏、興膳氏の調査結果に『遊仙窟』の五言八句の詩の粘法の状況を重ね合わせるならば、その粘法の到達度は宋之問らの域までは到底至っておらず、一世代前の初唐前期の状態にあった。勿論、宋之問はこの時代の先頭を行く詩人で、その到達度と等しくあることを求めるのは難しいことかもしれない。また『遊仙窟』の詩は、『遊仙窟』という小説中にあるもので、話の展開や本文中の表現によって制約を受けた詩と、一般的な詩とを同列に扱うことは難しいとも考えられる。とは言え、そもそもこのような文学作品を書くこと自体自身の文才に自信があつてのことであろうし、書き上げた文章も詩も作者張鷟の文才の到達点と理解するべきであろう。

ならば、そこから次の二点が導き出せるのではないか。一つは張鷟自身の能力的な点から、彼の韻律上の詩作能力は当時の先端にはなく、一世代程後れていたという点である。今一つは、当時の社会という点から、ここにある『遊仙窟』の詩で十分に当時の社会が求める詩作水準を満たしていたということである。自分の文才に自信があつて書き上げたものであるならば、それは社会の要求、読者が求めるもの以上のものを提示したと考えられるからである。仮に近体詩の音律が一般化していたならば、現状のような『遊仙窟』の詩では十分な評価はなされないであろう。

以上のことを、本稿での結論としたい。これまでの考察により、『遊仙窟』の形式から導かれる詩についての在り方は見えてきたと考えるが、『遊仙窟』の詩の内、まだ五言四句の詩についての考察が残っている。この詩は五

十七首あり、『遊仙窟』の詩の七割近くを占める。次にこれらの詩について考察を加えて、更に時代的な位置付けを明確にしたいと考える。

【注】

- 1 『上代学論叢』（和泉書院 二〇一九・五）
- 2 「散」は去声二十八翰韻と両用である。
- 3 「処」や「去」と「遇」の通用の例として他に、儲光羲や王昌齡、李白、そして白居易などにも確認することができ、唐代全般に渡って通用されるものであったと推測できる。去声九御韻と同十遇韻、同十一暮韻に属する他の文字にまで広げるならば通用の例は更に多く確認できらるであろう。
- 4 上海世紀出版集団 上海教育出版社 二〇〇二・九
- 5 『中国詩文の美学』（創文社 二〇一六・六）
- 6 東洋文庫『遊仙窟』は訳のみで本文を載せていないが、当該箇所は「澄みわたる水にひそみし魚のかげ 生いしげる森にさえずる鳥のうた」（傍線―引用者）と訳されており、「静」の理解に立つと推測する。なお、金剛寺本では当該詩は欠落部分に含まれ、不明である。
- 7 九州大学『中国文学論集』二二（一九九二・一二）
- 8 『唐詩韻律論』（研文出版 二〇一三・一〇）
- 9 早稲田大学『中国詩文論叢』（一九八二・六）

【本稿で用いた『遊仙窟』の古写本、及び注釈書等】

- ・岩波文庫『遊仙窟』漆山又四郎 訳注（岩波書店 一九四九・一一）
- ・創元文庫『遊仙窟』魚返善雄 訳（創元社 一九五三・一）
- ・『真福寺本 遊仙窟』（貴重古典籍刊行会 一九五四・一）
- ・東洋文庫『幽明録・遊仙窟他』前野直彬・他 訳（平凡社 一九六五・五）

- ・『遊仙窟全講 増訂版』八木沢元 著（明治書院 一九七五・一）
- ・『江戸初期無刊記本 遊仙窟 本文と索引』蔵中進 編（和泉書院 一九七九・八）
- ・岩波文庫『遊仙窟』今村与志雄 訳（岩波書店 一九九〇・一）※醍醐寺本の影印を載せる
- ・『金剛寺本 遊仙窟』東野治之 編（塙書房 二〇〇〇・八）
- ・中国古典小説選『古鏡記・補江総白猿伝・遊仙窟（唐代I）』成瀬哲生 著（明治書院 二〇〇五・一一）
- ・古體小説叢刊『遊仙窟校注』李時人・詹緒左 校注（中華書局 二〇一〇・五）